

昭和45年用(昭和44年9月末)

# 東京工業大学 窯業同窓会会員名簿

付 会誌第10号

## 窯業同窓会

〒152 東京都目黒区大岡山  
東京工業大学  
近藤連一 気付  
電話 726-1111 振替口座 東京 196855 番

## 叙勲受章その他

はじめに、この2年間に、各方面で活躍され、それに対して叙勲、授章あるいは受賞また、長年の研鑽の結果に対して学位を授けられた方々の名をつぎにかかげ、衷心よりお祝いを申し上げ、また今後の御活躍をお祈りする次第です。

臼井 芳一氏 (伊奈製陶株式会社 社長)  
藍綬褒賞  
小島豊之進氏 (日本碍子株式会社 取締役)  
藍綬褒章  
森谷 太郎氏 (東京理科大学 理工学部長)  
藍綬褒章  
大野 政吉氏 (旭硝子株式会社 顧問)  
勲3等旭日中綬章  
上田 滋穂氏 勲3等瑞宝章  
浜田 庄司氏 (陶芸家) 文化勲章  
宮川愛太郎氏 勲5等瑞宝章  
斎藤 勝一氏 (八戸高等工業専門学校 教授)  
「高純度水酸化マグネシウムの製造に関する研究」により東京工業大学において工学博士の称号を受ける  
木村 脩七氏 (東京工業大学原子炉工学研究所 助手) 窯業協会進歩賞  
福長 脩氏 (科学技術庁無機材質研究所 研究員) 窯業協会進歩賞

池ノ上 典氏 (黒崎窯業株式会社 取締役)  
窯業協会技術賞  
名和 二郎氏 (日本特殊陶業株式会社 常勤顧問) 窯業協会技術賞  
山本準之助氏 (日本硝子株式会社 工務部長)  
窯業協会技術賞  
太田 千里氏 (旭化成工業株式会社 化成品事業部付主任企画員) 窯業協会技術賞  
藤岡 幸二氏 (京都陶磁器協会 相談役)  
窯業協会功労賞  
小原 甚八氏 (株式会社小原光学硝子製造所 相談役) 窯業協会功労賞  
桧山 真平氏 (中部工業大学教授) 窯業協会功労賞

以上のとおりですが調査もれもあるかと存じ、あらかじめお許しをいただきたいと存じます。また小原甚八氏には受賞後間もなくお亡くなりになりました。謹んで哀悼の意を表します。

この2年間、わが国の窯業界は大きな躍進をとげましたが、またその半面、同窓である多くの貴重な先達を失いました。その中で、昨年、相ついで世を去られた元母校教官の榎本および宮川両先生に寄せられた大野会長の弔辞、山内先生の追悼文を次にかかげ、謹んで御冥福をお祈りします。

## 榎本修二先生への弔辞

会長 大野 政吉

榎本修二君の霊前に同窓生一同を代表し、謹しんでお別れの御挨拶を申し上げます。

君は大正6年、蔵前高工といわれた東京高等工業学校の窯業科を優秀な成績で卒業し、そのまま母校に残られ助教授として教鞭をとられました。常に変らぬ温顔と厳格なうちにも情こまやかな教え方はたちまち学生の心をとらえ、君の専門とする陶磁器に関する講義と実験は楽しい雰囲気ですすめられ、同僚の模範でありました。

大正11年、学問を深く掘り下げ知識を広くするために、2ケ年を欧州に留学され、帰国後教授に昇任されました。昭和4年、母校が東京工業大学に昇格するにおよび助教授に任ぜられ、陶磁器工学について、いよいよ研学を積まれるとともに専門著書を出版して学生の教導ばかりでなく、わが国陶磁器工業の学究的な先導者となられました。

昭和16年、東京工業大学教授となり、その頃より国情が次第に激動して世界情勢が変化するにつれて、当時電磁器工業界の雄であった松風工業株式会社に望まれて技師長として迎えられました。しかし太平洋戦争への突入以後における窯業界は一般に不振のまま終戦となりました。

昭和25年輸出陶器専門の松風陶器株式会社に

転任され、同41年まで職務に尽力されました。

この間社団法人大日本窯業協会の常議員、理事として参画し、時に編集理事としては心血をそそぎ今日の盛大なる窯業協会の会誌その他の基礎造りに熱心に協力されました。それらの功績は誠に絶大なるものがあると申さねばなりません。

従四位勲四等。これは君がすでに昭和16年に受けられた輝かしい荣誉でした。それからの二十有余年のわが国窯業界のため、特に陶磁器工業への貢献は訓育を受けた者を通じ、また君が実践してきた窯業技術をとおして生きつづけることでありましょう。

榎本君、君は忽然として去られてしまったのです。もう一度、是非同窓会に出席して眼鏡の奥の優しい眼で息をはづませるようにして話す調子で聞かせて欲しいことも沢山ありましたのに、それを今申しあげても詮ないことと申さねばなりません。

君はすでに白玉楼中の人となられました。御霊安らかに、御家族のうへと我等同窓の行方をみまもって瞑目されますように。

これをもって弔辞といたします。

昭和43年5月25日

## 故榎本修二さんを偲ぶ

山内 俊吉

昭和43年5月24日、私は大阪での講演会に出席、その席上「榎本先生昨夜御逝去」の悲報に接し全く驚いた。私は会の終了をまたずして名古屋に向った。

先生の御宅に御伺いし悲しみと深い感慨をこめて御霊前に額づいた。悲嘆の御遺族、特になほ子夫人から胃潰瘍による先生御臨終の様や数々の思い出をききつつ、私は大岡山で先生と共に楽しく過したありし日を追憶し人の世の無常を嘆じたのであった。

先生は明治27年の御生れで、大正6年東京高等工業学校窯業科を優秀な成績で卒業され、請われてそのまま母校の助教授となり大正11年英独米に2年間留学、帰朝後間もなく教授となり、大学昇格後は大学助教授兼専門部教授となり、昭和16年10月大学教授（高等官二等従四位勲四等）

に栄進された。

私が先生の講義をきいたのは大正11年4月から6月留学されるまでの約2ケ月間、燃料および燃焼装置の講義をきいたのみで極めて短期間であったが、若くて張り切った態度で評判の歯ぎれのよい名調子で講義された、そのスマートな御姿が強く印象に残っている。

私が先生に親しく御導きに預ったのは九州大学を出て大岡山に赴任した時からである。当時先生は窯業協会雑誌の編集理事を担当され、人手がなかったので研究室で自ら編集の企画から校正まで一人でやっておられた。私はよくその手伝いをさせられたのである。特に刷りあがり前になると印刷屋の三秀舎に夕方から出向いて夜おそくまで校正せねばならぬのが常であった。このように先生は今日の窯業協会雑誌育ての親であり、編

集をとおして協会の基礎づくりに対する功績は高く評価されねばならぬ。

先生は陶磁器を専攻され、いろいろの研究をされたが、私には特にセレン赤についての研究が印象的である。また陶磁器なる著書も極めて好評であった。また先生は講義や実験指導もなかなか熱心で学生の面倒をよく見られた。このように先生は窯業学界のためにつくされたが、業界にも多くの足跡を残された。

昭和16年大学を辞し、当時電磁器で有名な京都の松風工業株式会社藤岡幸二専務のもとに技師長として迎えられ、そのうんちくを傾けて奮闘され、後取締役となられた。しかし敗戦に伴う業界変動のため同社を辞し、昭和25年名古屋の松風陶器株式会社工場長に転出され、昭和41年ま

で輸出陶磁器の製造を通じて我国工業の発展に多大の貢献をされた。

このように述べてくると先生は真面目一点張りの学者、技術者のように思えるかも知れぬが、決してそうではなく常にこやかでユーモラスなところがあり、何等の屈託のない態度で何人とも親しみあえる人柄で、卒業生は勿論先生に接した大方の人々がその温かい人間性にひかれ、深い敬愛の情をよせていたようである。

友達が集ればよく先生のおうわさをしその御壮健を喜んでいたのに、思いがけなく急逝されたことは誠に残念の到りである。

ここに心から先生の御冥福を祈り、併せて令夫人をはじめ御遺族の御幸福を念じつつ、思い出の一端を述べて先生を偲ぶ言葉といたします。

## 故宮川愛太郎さんを偲ぶ

山内 俊吉

皆さんが大変親しみをもっておられた宮川さんが昨年6月14日永眠されたことは誠に残念である。

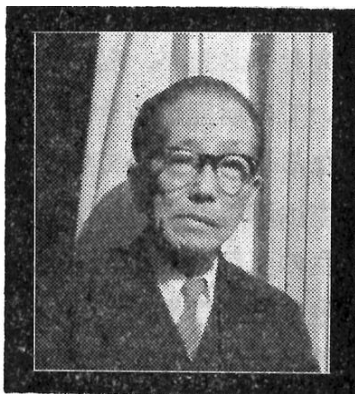
宮川さんは高血圧による軽い発作で昨年1月入院し、次第に快方に向われ退院間近に肺水腫を併発、忽然として急逝されたのである。

入院のことを秘めておられたので、恐らく同窓の皆さんも殆んど御存じなかったことと思う。

誠に哀悼の極みである。

宮川さんは東京高工から東京工大へと一貫して50余年の長きにわたり母校の発展と共に生きてこられた大功労者である。昭和17年技術院賞、昭和40年黄綬褒賞、産業教育功績者としての文部大臣表彰、昭和43年勲五等の叙勲などがその功績の偉大さをよく物語っている。

氏は明治27年東京に生まれ、大正3年5月東京高工の窯業工場に勤務し窯場の仕事に専念し、東京工大となつてからも窯業工場に所属し榎本修二先生の研究や学生実験の極めて忠実な助手であった。後昭和16年大学助手に任官し、窯業工場の主任として研究のかたわら学生実験を担当し、終戦後は窯業研究所助手をも兼任し、昭和41年まで51年の長きにわたり鋭意大学に於ける



教育研究の縁の下の力もちとして極めて大きく貢献された。

さらに本務の傍ら教官、学生等に関するいろいろの雑用は万事心よく引きうけ、間違いなく処理し、窯業学科にはなくてはならぬ貴い存在であり、また卒業生の連絡もよく窯業同窓会誌の育ての親でもある。

この様にその誠実で極めて親切な行動力は、いつのまにか卒業生や学生が「宮川先生」と慕い、無限の敬愛と信頼をよせるようになっていった。

しかし大学にも助手の定年制が設けられ、惜しまれつつ昭和41年退官されたが、その誠実な人柄は、兼務されていた母校80周年記念事業総合研究館募金会の募金課長を引きつづき専念してもらったことになった。

この頃から玉川大学芸術学科の陶磁器の非常勤講師として学生との接触を楽しまれ、小唄の稽古をされたりしてよい晩年であると喜んでいた矢先にこの訃報である。

氏が窯業協会誌に多くの研究報告や資料を掲載し、また長年にわたるうんちくを傾けて陶磁器、陶磁器釉薬の二書を刊行、極めて好評であることは既に御承知の通りである。

いま、奥さんは東京工大航空卒で現東京都立大学教授として活発に仕事をされている御令息松男さん御夫妻や御孫さん達と御元気で御暮らしになっている。

ここに心から宮川さんの御冥福を祈り併せて御遺族の御幸福を念じつつ、思い出の一端を申し述べて宮川さんを偲ぶ言葉といたします。

# 訃 報

以下の方々に衷心より哀悼の意を表します。

浮洲武彦	明治 44 年卒	井上英吉	大正 2 年卒
遠藤隆雄	昭和 4 年卒	岩宮 勇	昭和 19 年卒
河村吉三	大正 11 年卒	遠藤 一夫	大正 2 年卒
桑山政武	大正 8 年卒	小原 甚八	明治 44 年卒
大塚喜蔵	大正 8 年卒	川畑 健雄	昭和 4 年卒
大島村正雄	大正 4 年卒	原田 親信	昭和 2 年卒
伊藤 亮	大正 9 年卒	平野 英久	昭和 18 年卒
田山幹太郎	大正 7 年卒	渡辺 明	明治 29 年卒
吉沢篤二郎	明治 45 年卒	榎本 修二	大正 6 年卒
中市島烈一	大正 4 年卒	坂本 誠吾	大正 4 年卒
浅香 長 蔵	大正 11 年卒	野口 武雄	昭和 19 年卒
	大正 4 年卒	宮川 愛太郎	元 教 官

## 御 注 意

今後の同窓会への御連絡は、  
〒152 東京都目黒区大岡山  
東京工業大学 近藤 連一 気付  
東京工業大学窯業同窓会  
へお願いします。もちろん旧宛名でも、  
お取りつぎは致します。

## 昭和43年度総会と懇親会

大学の時計塔前の桜並木の花も散ってみずみずしい青葉が吹き出し、若さに輝く沢山の新生の顔が構内の芝生にあふれる頃になると、恒例の同窓会総会の季節がめぐって来る。今年は東京、赤坂見付にちかい都市センター・ホールの地下で、4月25日、夕陽があかあかと高速道路の曲線の美しい交錯を染め出すころ、いつに変わらぬお元気な大野会長の挨拶によって幕を開けた。

来会者は次第に数を加えて、およそ80名、その中には大正7年に卒業され、今年で50年をむかえる鈴木保雄、田山幹太郎の御二方の顔も見られた。宗宮、宇田川両幹事の庶務、会計の会務報告につづいて、大野会長より島岡達三氏（昭和16年3月卒）制作の額皿が卒業50周年記念品として6名の方（阿部庄司、荻島憲二、舒信偉、鈴木保雄、田山幹太郎、村瀬六郎）に贈られ、前記お

二方が代表でこれを受けられると万場の拍手を浴びた。山内無機材質研究所長および境野幹事による学内外の近況報告、大野会長座長による幹事の選任——（全員留任）——がつづいて、ここに近藤幹事司会による総会は、なごやかな雰囲気の中に無事終了。ひきつづいて、沢山のビールが運びこまれ、宗宮幹事によって懇親会の開催が宣せられる。ビュッフェ形式なので、コップを片手に旧会員も新会員も、つぎつぎとテーブルの間を流れて歩き、終始笑声が絶えぬうちに時間も移り、尽きぬなごりのうちに、万才を三唱して散会した。

ただ悲しまれるのは、お元気にみえた田山幹太郎氏がいまはすでに故人となられたことで、ここに謹んで哀悼の意を表します。



昭43年懇親会 左より田山、大野、鈴木、山内の諸氏（笹沼氏撮影）

## 昭和42年度収支決算報告書

収入の部		支出の部	
収入総額	554,117円	支出総額	481,775円
内 訳		内 訳	
前年度繰越金	50,099円	卒業50年記念品代(10名)	30,000円
事業寄付金	71,700円	総会・懇親会通信費	16,230円
名簿広告料	432,200円	名簿印刷発行費	432,245円
預金利子	318円	雑支出(振替為替手数料等)	3,300円
		差引残高(明年度繰越金)	72,342円

\*\*\*\*\*

## 昭和44年度総会と懇親会

昭和44年度の総会ならびに懇親会が4月25日、東京・赤坂の都市センターで開催された。

午後5時30分総会が近藤幹事の司会で開催され、大野会長の挨拶の後に会場報告に移り、庶務関係を田賀井幹事、会計関係を宇田川幹事がそれぞれ報告した。

続いて卒業50年の大正8年卒の方々、北川信吉、久保季吉、斎藤永吉、藤井達人、星野勉、村上三五朗、高山泰造、中辻正信の諸氏に上越クリスタルガラス花びんが贈られ、村上氏が代表として挨拶をされた。

次期役員については 会長 大野政吉、副会長

鮎川武雄、石塚正信、山内俊吉、倉田元治、森谷太郎、常任幹事は庶務として近藤連一、浜野健也、会計は小坂文予、名取賢荘が担当することになった。

さらに今年1月から始まった東工大紛争などの大岡山における大学問題が小坂助教授から説明がなされた。

総会を終り、引続き懇親会が盛大に催され、出席者は100名近く、藤岡先輩の乾杯の後、なごやかに進行した。来年大阪での集りを約し、同8時閉会した。

\*\*\*\*\*

## 昭和43年度収支決算報告書

収入の部		支出の部	
収入総額	255,048円	支出総額	155,588円
内 訳		内 訳	
前年度繰越金	72,342円	昭和42年度総会、懇親会々費	114,210円
事業寄付金	36,500円	卒業50年記念品代(6名)	18,000円
昭和43年度同窓会懇親会々費(73名)	146,000円	昭和43年度総会、懇親会通信費	15,920円
預金利子	206円	故榎本・宮川両先生霊前生花代等	7,308円
		雑支出(振替為替手数料等)	150円
		差引残高(明年度繰越金)	99,460円

\*\*\*\*\*

## 卒業50年記念品に対する御礼状

窯業卒業50年記念品硝子花瓶1個、右正に受領いたしました。厚く御礼申しあげます。

昭和四十四年五月吉日

高山 泰造

窯業同窓会御中

拙者、七月八日より十四日迄、東京高島屋にて個展を開きますので皆様、何卒御高覧賜りますようお願い申しあげます。

二十三日の祝賀会には是非出席させていただきます。

## 昭和42年度事業資金寄付者芳名

500円	中堅佐水 中藤古尾 伊井柘山 梅浅横	村田藤地 川井賀野 藤上植崎 田田溝	純純満順 義幹	一尚夫穗吉 透根也登 昭雄雄雄 德太郎	吉新中木吉 外藤大張 下田越北 境	沢居川村見 川岡庭	篤善邦一恒 進了宏烈 高次郎熊 吉雄	山内岸村志 野丹羽野 内山原藤 後宮和泉 田川	祐次茂男 和紀夫稔 英昭浩輝 直一英正 昌重	川笹加古勝 清山渡吉 猪関雨大 氏名不明	畑沼藤丸田 水形辺川 股口宮木 通(2名)	健宗一郎 博惠安一 行貢三淳 正胤	雄一郎之勇 一広一行 貢三淳 胤	
700円	村石山米 三大柴中 田賀毛	杉毛口谷 浦庭田村 賀井利時 名田	忠健二静 次郎二郎 逸夫夫雄 明											
800円	山口													
1,000円	山米三大柴 中田賀毛	谷浦庭田村 賀井利時 名田	静次郎二 郎逸夫夫 雄明		伊内田野 横塩富	藤藤村口 瀬田里	正三義一 臣雄次利 務	上村菅坂 長藤河	田瀬原東 谷井嶋	滋六敏文 正正千	穂郎夫市 義雄尋	伊藤中青 宮市	藤井村木 川塚	亮男厚郎 年
1,200円	毛													
2,000円	十氏													
3,000円	吉													

## 昭和43年度事業資金寄付者芳名

500円	長谷川中飯 河小境鈴 友浜森不	村塚井泉 野木田野 明	泰清厚雄 之助雄夫 也邦氏	金新梅川 近佐田中 福森	高居田村 藤多端沢 井本	寿善夏新 連敏精三 知彦哲治	男三郎雄 太郎一之 一彦哲治	稻赤市木 笹斎田中 水鈴	生尾塚船 沼藤中村 野木	謙洋要太 郎宗一郎 六宏八茂 弘	次二年 進六助樹 茂	黒田永木 宇田島角 西村松	田見楽村 川岡田上 本	永進秀一 重達穎晴 三五朗夫	二一光男 和三保哉 夫
1,000円	中名長	村取野	藤一郎莊 勸吉	河嶋千尋 西田一雄				倉田野	田口長	貢次		田上嘉秋 日笠泰行			
2,000円	長														
3,000円	大														

## 44 年度事業資金寄付者芳名

500 円	山須横池田毛柘藤副梅加小佐々高中前米長中木河伊渡窪華久水長辻宇	口藤瀬田代利植岡島田藤泉木橋村田谷岡川村田藤辺田房保野岡野	静信楠純信繁夏政善茂紘能芳忠為順一幸正一三嘉季茂琢常達保幸太郎	逸信次勉熊一雄了男雄良助之助一淳郎行吉男司三行郎勝吉樹雄喜路雄二	秋橘吉山中浦成稲色江加近白友中宮山川斎藤柳鈴中越前河小吉木菊	葉田崎辻田村川藤藤川田沢里本村藤井木尾谷嶋田村地	徳多吉俊正清秀哲欽連正三知務勇新勝透重竹次民千豊多光	二里三雄信次正泰男夫一郎一清雄彦務二太郎一透光夫雄進格雄治	青下毛川上岩田野飯宇田国末中丹山中大木岩	木平利口山崎畑上塚川船分野村羽本嶋木戸田	俊高次郎尚敏郁勝敏重太郎悌八準之浩胤二喜	郎彦節夫弘一厚和隆六助誠助浩胤二喜	張安増後中佐々松松岩大草齋田中福山野今巽飯	鴻芸田藤口木永井崎槻間藤辺村井室口間塚	烈一浩夫雄健郎実助一保六之清哲臣男春夫太郎
1,000 円	伊渡窪華久水長辻宇	藤辺田房保野岡野	一行郎勝吉樹雄喜路雄二	柳鈴中越前河小吉木菊	木尾谷嶋田村地	重竹次民千豊多光	高文三五朗	藤井正雄	河原田次剛勉男吉吉弥夫	星野川藤原沢	赤北齋芝佐	次次信永雅光	村馬田田藤田	中有太倉角佐戸	厚喜里貢保功雄
1,500 円	宇	野	達												
2,000 円	鈴藤森大	木岡谷野	保幸太郎												
3,000 円	森	谷	太郎												
5,000 円	大	野	吉												

### 寄付のおねがい

皆様の御援助で会の財政もますます黒字をつづけておりますが、印刷費その他、値上がりしておりますので、なるべく数多くの方々からの御寄付をおよせ頂きたく、何卒よろしくお願い致します。金額は1口、500円、いく口でも結構でございます。



## 大岡山通信

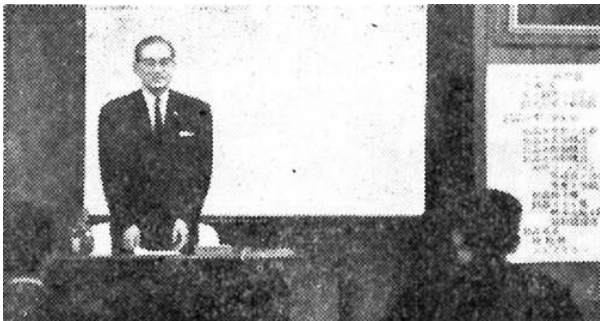
### 第5回 Dr. G. Wagener 記念 公開学術講演会

42年11月9日、午後2時から4時の約2時間にわたって、東京工業大学本館第一会議室で開催された。

京都大学水渡英二教授に今年度はお願い、先生の永年にわたる研究成果を「電子顕微鏡による無機材料の研究」と題して講演された。

御講演の内容は「セラミックス」3 [6] 443-451 (1968) に詳細に記載されている。

聴衆は遠く秋田、名古屋、京阪神から来学され、会場には立錫の余地のない位で盛会であった。



講演中の水渡教授

化物三成分系の拡散」と題した講演をなされた。会場は山内先生を始め、遠く京阪神から来学された方々約100名でうずまり、討論も活潑に行なわれ盛会であった。



講演中の山崎教授



講演中の大石教授

### 第6回 Dr. G. Wagener 記念 公開学術講演会

43年11月7日、東京工業大学本館第一会議室において、午後1時30分から5時まで開催された。本年はDr. G. Wagener 来日100年目の記念すべき年である。

東京工業大学山崎俊雄教授が「殖産興業とワグネル——ワグネル博士来日百年を記念して」と題した講演をなされ、更に九州大学大石教授が「酸

東工大構内のワグネル先生像附近の整備は、本年度から予算が計上され、先ず第一期工事として水銀灯一基の設置、散歩道の設置などが計画され、11月の講演会に間に合うように実施され、像附近は面目を一新した。

この会の運営に当り、大野政吉氏から11万円の多額の寄附を頂いた。誌上にてお礼申上げる次第である。(宗宮重行)

## 学内情報

この2年間の大岡山キャンパスの変容は、なにかしら激動する現代社会を象徴するかのよう激しいものでした。大学の代表も実吉学長から斯波学長へ、そして本年5月にはさらに現在の加藤代行へと目まぐるしいバトン・タッチがおこなわれています。キャンパスにも次つぎと新しい建築がならび、工場地帯には新しく6階建の中棟の西半分がたち、同時に東棟もさらに半分延長して完成しました。また研究所地帯には工業材料研究所

の東側に隣接して、天然物化学研究施設のビルができ、その一部には工業材料研究所の研究室もあります。また窯業学科創設の恩人、Wagener博士の記念碑付近も久しぶりに整理され、幅1メートルほどの、きれいな路が完成して、この大先達を記念する場所としてふさわしくなりました。

さて、現在の大学の中の無機材料工学(旧窯業)関係の教官職員の分布をまとめたのがつぎの表です。あまり大きな移動はありませんが、助手クラスに新鋭が顔を出してきました。また、学科の



正門バリケード



芝生のスロープわきにできた講堂



本館脇の事務棟



工場地帯にできた6階建の北棟

無機材料工学科

(講座名)	(教授)	(助教授)	(助手)	(技官)
窯業学第1(珪酸塩物理化学)	川久保	加藤	太田・五十嵐	—
窯業学第2(焼成)	素木	宇田川	大津賀・新	中
窯業学第3(熔融)	境野	—	滝沢・山根	山本
地質鉱物学	山田	小坂	浦部・太平	大場
材料加工学	—	—	—	—
工場	—	—	林	大矢

工業材料研究所 (所長 加藤六美)

(部門名)	(教授)	(助教授)	(助手)	(技官)
基礎計測	加藤	浜野	秋山	—
固体物理	岩井	竜谷	篠原・森川	前島・坂井
無機焼成材料	田賀井	近藤	後藤・井関	大沢
無機熔融材料	佐多	—	中村	高橋
超高温材料	斎藤	宗宮	沖川・沢岡	吉永
合成無機材料	清浦	—	黒沼・伊藤	上西
化学冶金	佐藤	—	多田・畑野	野口
複合材料	後藤	—	佐藤・安藤	鈴木
工場	—	—	小磯	唯野・石井
共通	—	—	—	藤本

原子炉工学研究所 (所長 垣花秀武)

(部門名)	(教授)	(助教授)	(助手)	(技官)
原子炉材料	黒田	鈴木	木村・持永	吉田・長谷

(但し関係部門のみ)

方に「材料加工学」講座が増設されましたので、その内に、ここにも新しく教授、助教授、助手が入って、ますます賑やかになってきます。

さて、学園紛争については、一時はしばしば新聞紙上にも出て、同窓の皆様には御心配をおかけしたと存じます。結論からさきに云いますと、本年（昭和44年）9月1日から1年生の、また9月8日からは全学の授業が平常どおり始められて、すでに無事に1ヵ月を経過しました。このままで行けば、あとは目下検討中の大学改革案を決定し、遂行するだけですが、早くそうなることを祈っております。

紛争そのものの伏線はすでに昭和43年ころから、新しく建設予定の寮の学生自治の問題をめぐって芽生えていました。それが学生運動の形をとりはじめたのが、本年の初めからで、寮生の学長に対する団交（団体交渉）要求となり、学内騒然となるうちに、1月23、24、25日の3日間、講堂に学生、教官を溢れるばかりに集めて行なわれました。それ以前にも、同月18日には東大の安田講堂の攻防戦が世人の耳目をあつめ、学内では連日連夜の教授会で白熱した議論がたたかわされ、また学生との討論が白熱して、わたくしを含めて教官数10名が大教室でカンヅメになり、翌朝の5時半まで討論を強いられるなど、学内外に不穏な空気が充ちていました。果たして、この団交は異常な空気のうちに開かれて、終始、怒号と罵声が荒れくるい、第1日は正午から午後11時まで、第2日は午前9時から翌日の午前1時まで、休みなしにつづけられ、学生の矢つぎ早やに浴びせる質問に対して、斯波学長が何回となく絶句し、ついには椅子に座したまま、頭を垂れ、深い沈黙に陥いるなどという光景がみられました。そして第3日目に学長から突如として団交打切りの声明が出されるや、事態は急速に流れはじめ、何回かの学生大会の後に、1月末の深夜、ついに無期限ストライキを決議し、2月10日の深更、一部の学生によって、正門をはじめとして学園は封鎖されるに至りました。

もちろん、この前後にも、全学教授会の学生に対する声明、学生の要求に答える学長声明などが出されましたが、団交を固執する学生側と合意せず、3月下旬には、封鎖解除、話し合いを要求する教官多数による正門バリケード前の座りこみまで行なわれました。しかし、これを境にして、かなりな教官が学内に潜入しはじめ、過激な学生も、これを見逃がすような空気になり、やや雪解けを思わせる空気が流れて、われわれも希望を抱いたものです。しかし5月8日に企てられた反過激派学生による新しい学生大会の開催をめぐって、学園は紛糾し、ついに負傷者を出すにいたって、事態はふたたび混迷に陥り、中旬には学長の

交代がおこり、田町の校舎でおこなわれた新入生に対する授業も妨害され、ついに7月に入り、機動隊の導入という局面を迎えた次第です。

しかし、これだけでは、おそらく紛争の原因、大学の不当と思われる腰の弱さなど、まったくお分かりにならないと思います。そして、これほど説明のむずかしいこともありますまい。逃げるわけではありませんが、他の数かずの大学もふくめて、なお時間をかけて事態の解明をする心要があるようです。ただ、わたくし個人の経験を語ることを許されるならば、紛争中、交渉委員会の一員として学生の中に分け入って、過激派の学生とも、夜昼をとわず、いろいろな角度からの討論をこころみ、かれらの何人かの胸中にて、行動的には賛成できないながら、青年としての純粋な魂の叫びを聞きました。また、教官同志も、あらためて、大学の本質、ひいてはその理想的な在り方などについて、ずい分、議論をたたかわせました。おかげで、全学の教官が、あらためて相互の人間の理解を深め合ったものです。これらの事は、この暗い紛争の期間を通して、得られた貴重な成果ともいえるでしょう。

前号で御報告した、大学が多摩川の向うの長津田に獲得した新しい土地の開発も、紛争のおかげで延引し、建物がたつのは2~3年先になりましたが、次号では、これについてもっと具体的なことが書けると思います。

## あとがき

宮川先生が退官されたあと、同窓会誌をまかされて、第8、第9号および本誌と、3冊をなんとか作り上げてお届けして参りましたが、今回、近藤連一氏と交代し、しばらく休ませて頂くことに致しました。永い間、皆様の消息をあつめたり、拙い編集で御迷惑をかけたり、おつき合い頂きましたことを衷心より感謝しております。とくに今回は紛争の影響を受けて、編集に大分困難がありました。そして、この機会に、足かけ6年間、繁雑で地味な名簿改訂の原簿作成を手がけて頂いた、わたくしの研究室の山本技官に心からお礼を申し上げます。

昭和44年11月15日印刷

昭和44年11月20日発行

編集兼発行人 境野照雄

印刷所 株式会社 技報堂

印刷者 大沼正吉

発行所 東京工業大学窯業同窓会

東京都目黒区大岡山

東京工業大学 近藤連一 氣付

振替口座 東京 196855